

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将

一豊と掛川

その9

接待上手だった一豊



関ヶ原の合戦の前、一豊が家康を接待した久延寺(掛川市佐夜鹿)



久延寺境内の茶亭跡

◆軍事力と人脈交流の時代

一豊は20歳のころから、45歳で掛川城主になるまで、歴史上の数多くの激戦に参加し、生き延びてきた数少ない戦国武将ですが、周囲に細かな気を配る接待上手な一面も持っていたようです。

特に、掛川城主であった10年間は、後に天下の指導者となる重要人物との接待を積極的に行っています。天正18年(1590)8月、奥州制定後、京に凱旋する豊臣秀吉を、大井川のほとりでもてなしています。また、文禄2年(1593)閏9月、熱海の湯治から帰京する秀吉の養子、秀次を遠江川尻(牧之原市)に迎賓館を設けて供応しています。この時は、秀次の通る道路の修復や橋の手入れ、会場の畳を新しくするよう求め、もし手に入らなければ、掛川城のものを運ぶよう、細かなことまで指示を与えています。慶長2年(1597)4月には、江戸と京を往来する徳川家康・秀忠父子とその家臣らが、掛川領内を通過する際に歓待し、そのお礼状が残っています。

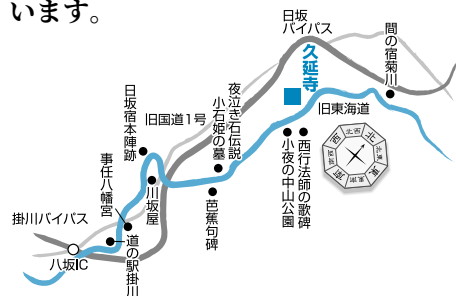


土佐藩9代藩主豊後が天明9年(1789)に建てた記念碑

◆関ヶ原前、久延寺で家康を接待

慶長5年(1600)6月24日、会津の上杉景勝討伐に向かう家康を、小夜の中山峠に設けた久延寺境内の茶亭でもてなしました。そして、一豊も7月3日に掛川を出陣し、7月24日には千代から届いた手紙をそのまま家康に差し出し、翌25日には歴史上で大きな節目になる、小山の軍議に参加し、家康軍への参加を誓います。

小夜の中山での接待が、山内家の礎に大きな影響を与えたことと伝わっていたのか、約200年後の天明9年(1789)、山内家9代藩主の山内豊雍は、記念碑を一豊が家康をもてなした久延寺の境内に建てています。



(監修：掛川市郷土研究会連絡協議会)